

## ミャンマースタディツアーを終えて

中牟田和佳

私が今回ミャンマースタディツアーに参加したきっかけは、母から JAMAHA の活動について教えてもらい押されたからだ。正直、行くつもりもなくアメリカにでも行きたいと思っていた私は、母の話を軽く受け流していた。しかし、アメリカ行きがキャンセルになりバイト三昧だったため、春休みを何もせずに関わりたくない。また、ボランティアという肩書がほしいという他の人に言ったら怒られそうな雑な理由から、スタディツアーに参加することを決めた。ミャンマーに行って特に感じたことが2つある。

1 つ目は初日に吉岡先生の講演を聞いたことだ。吉岡先生はミャンマーの子供たちの為に働いている。最初、私は吉岡先生がすることが理解できなかった。なぜなら、もし日本で働いていれば、たくさん稼ぐことができるのに対し、ボランティアで治療をすれば給料が入ってこないからだ。しかし、話を聞き進めていく中で、そのように感じた自分がちっぽけで恥ずかしくなった。先生は「その人にとっての価値観とは何か」を教えてくれた。私はまだ自立してないためバイトで得た給料だけでは生活することができない。そのため、吉岡先生のように人を救い、手助けをすることで価値を見出すという考えが頭の中に全くなかった。APU というグローバルな大学で学んでいるため、「価値観や視野を広げたい」ということは決まり文句のように言われており、私も大学入試の際に言い続けてきた。しかし、実際には確かに文化の違いは日々感じるものの、価値観や視野を広げられたほどの感銘を受けたことはなかった。このことから、自分の幸せの焦点を少し変えることで、いろんな人の価値観に出会うことができるということが分かった。価値観や視野が広がるというのはこういうことだったのかと心を動かされた講演だった。スタディツアー初日にして、自分の中での収穫ができ、来た意味を感じることができた。

2 つ目はミャンマーに来る前から疑問に思っていたゴミ拾い活動だ。このツアーに参加する前から予定表を見て、私はなぜミャンマーに行き、そこでゴミを拾わなければいけないか理解ができなかった。村の人々は、私たちが来なければゴミ拾いができないのか？そんな疑問を持っていた。ボートに乗り村に着くと、道の脇にはたくさんのゴミが投げ捨てられていた。そこで聞いた話には、ミャンマーの人たちはゴミを拾う習慣がないため道に捨てるというものだった。実際に、私たちと一緒にゴミを拾っている子供たちに対し、大人は椅子に座ったまま物珍しそうに眺めているだけという状況を見て、私の想像以上にミャンマーは環境が整っておらず、システムが成り立っていないということを知った。ゴミ拾い活動をしている中で、気になることがあった。それは、ゴミの中に日本語で書かれたパッケージのゴミがあったことだ。日本人が物を寄付するおろは素敵なことだと思う。しかし、ただ寄付するだけではなくその先のことまで考えて、なるべく包装が少ないものやゴミになりにくいものを寄付するなどするとなおよくなるのではないかと考えた。ミャン

マーにも、ゴミを焼却するシステムを早く作ることが、綺麗な街づくりを作る近道なのではないかと感じた。

夏にフィリピンにいたことから、発展途上国として比較したときに、やはりミャンマーはいろんな面からみて遅れていると感じた。確かにフィリピンにもゴミはあったが、街にはゴミ箱が設置されており、電力の普及も進んでいた。しかし、ミャンマーの人たちからは温かさを感じた。ショッピングをするにしても押し売りはしてこないし、ひったくる人や、お金をせがむ人も圧倒的に少ないと思った。地理的にみても、ミャンマーは中国やタイなどたくさんの国に囲まれている。このことから、ミャンマーはこれからさらに発展していくのではないかなと強く感じた。

今回ミャンマースタディーツアー私にたくさん考え、学ぶというチャンスくれた。参加していなければ知らなかったことや、感じることでできない気持ちもたくさん見つけることができ、5日間があっという間に過ぎていった。ここで学んだことを次に活かしていくためにも、これからもハングリー精神を忘れずにチャレンジしていきたいと思う。

中牟田 和佳